

『涉世録』について

—「白澤避怪図」にみえる妖怪資料—

熊澤美弓

はじめに

古来、人々は人知を超えた何者かの存在を信じてきた。そして、自らの知識では解明できない不思議な事象をそれらの仕業であると考え、その被害を防ぐために、事象を起こす妖怪や、それを防ぐ手段を書き記したり、そのような存在を退けることのできる存在の信仰といった様々な手段を講じた。そのようにして記された物のひとつに、『涉世録』がある。この文章は、「白澤避怪図」「白澤図」と呼ばれる白澤の絵画資料などに、抜書きとして見ることができる。本論文では、『国書総目録』においてもみることができないこの『涉世録』を復元し、その成立や発生について私論を展開していきたい。論文中に漢文資料を多く引用しているが、当該資料に訓点があるものについては、その訓点に従い、それ以外のものについては、適宜筆者が補って訓読した。また、文中に割注がある場合は、――であらわした。打ち出すことのできない字については、縦に重なる場合は「田＋共」↓「異」のように「―」、横に重なる場合は《シ＋畢》↓「澤」のように《》であらわした。論文内において「白澤」「白沢」と表記が異なることがあるが、これは参考とした資料に従った表記であり、特に表記によって意味を変えたわけではないこともここで述べておく。また、くずし字資料などの中で「□」とあるところは虫損などの事情で読むことができなかった部分である。

一 白澤

(一) 白澤とは

現在筆者が見つけることができた『涉世録』が見られる資料の多くは、「白澤避怪図」「白澤図」と呼ばれるものであり、中国の神獣である白澤の絵が描かれていることが多い。『涉世録』を具体的に見ていく前に、多くの資料で『涉世録』の文章と共に描かれている白澤とは、一体どのような存在であるかをまず見ていきたい。白澤は、中国の三皇五帝の一人としてあげられる黄帝の神話に見える。黄帝の神話について記した文章については、以下のようなものが見られる。

『軒轅本紀』（『雲笈七籤』¹所収 一〇一九年）

帝巡狩東至海登桓山。於海濱得白澤。神獸。能言。達於萬物之情。因問天下鬼神之事。自古精氣爲物遊魂爲變者凡萬一千五百二十種。白澤言之帝令以圖寫。之以示天下。帝乃作祝邪。之文以祝之。

（帝東を巡狩して海に至りて桓山に登る。海濱に於いて白澤を得る。神獸なり。能く言す。萬物之情に達す。因りて天下の鬼神の事を問う。古より精氣の物を爲し遊魂の變を爲す者凡そ萬一千五百二十種。白澤之を言い帝以て圖寫せしむ。之を以て天下に示す。帝乃ち邪を祝らかに作す。之の文を以て之を祝らかにする。）

『山海經圖』²（胡文煥編 一五九三年）

東望山有澤獸者。一名曰白澤。能言語。王者有德明照幽遠則至。昔黃帝巡狩至東海。此獸有言爲時除害。

（東望山に澤獸という者有り。一名を曰く白澤。能く言語す。王者徳有りて明照幽遠たれば則ち至る。昔黃帝巡狩して東海に至る。此の獸の言有りて時の爲に害を除く。）

白澤についての資料の多くにおいて、この二点と同じような記述が見られる。これらの文章から言えることとして、白澤は「萬物之情」に通じる神獣であり、五帝の一人である黄帝に授けることの出来るほどの鬼神に関する知識を有していたことが類推される。また、黄帝は神話の時代存在であることから、その神話に関わる白澤は中国においてはそれほど古くからの存在であると認知されていたのではないだろうか。他にも、王に徳があれば現れるということから、有徳の王の出現の印としての瑞祥であることや、「時の為に害を除く」という記述から、除災の性格も有していたことが見て取れる。

白澤の絵図や記述のある資料を見ると、古い時代のものには白澤の姿の記述は見られないが、時代が下るにつれて、白澤は様々な姿として捉えられており、その系統は大きく二種類に分かれる。ひとつは獣の姿をした系統であり、もうひとつは人面獣身の系統である。この二つを分類するにあたって、①顔の形態（人面系・獣系）②唇・齒③鬚④眉毛の有無⑤耳の形状のうち三つ以上の一致によって判断した。また、文字資料の中で、顔について明記されていないものは、分類の仕様がなないと判断して排除した。

（二）中国における白澤

白澤の資料のある地域としては、中国・日本・沖縄（琉球）が挙げられる。中国における白澤としては、初出は三二七年『抱朴子』³であり、これが白澤の資料としても一番古いものである。この中では、内篇卷十三極言に「窮神奸則記白澤之辭」（神奸を窮め則ち白澤の辭を記す）、内篇卷十七登涉に「則論百鬼録知天下鬼名字。及白澤圖九鼎記。則衆鬼自却。」（則ち百鬼録を論じ天下の鬼の名字を知る。白澤圖九鼎記に及ぶ。則ち衆鬼自ら却す。）と見え、白澤の姿やどのような存在であるかという記述は見られない。白澤の絵の初出は、一五八七年『大明会典』⁴ 卷六十一に、官服の意匠のひとつとして描かれているものである。服の模様以外にも、『大唐六典』⁵ などに白澤旗として見えるほか、『唐書』⁶ などでは枕、『隋唐演義』⁷ においては「白澤燈、光輝燦爛。」として麒麟燈を始めとした様々な獣燈のひとつとして挙げられている。

また、『隋唐演義』だけでなく、『西遊記』のような文学作品や仏典にもその名前が見えるなど、様々な分野に取り入れられている。絵画資料としては、獸型であり、『大明会典』のような龍の如き鱗に覆われた系統【図①】と、『山海經圖』



【図①】

のような獅子に似た姿の系統【図②】との二種類が見られる。一部、人面と言われれば人面に見える資料もあったが、前述の分類条件と照らし合わせると、獸として分類しても差し支えないように思え、また、仮にこれを人面であると捉えたとしても、一例のみであり、中国においてはそれほど広まらなかったと解釈して良いのではないだろうか。

以上のことから、中国における白澤については、獸型のみであり、旗や燈籠に麒麟などの吉祥とされる動物とともに並んでいることから、祥瑞として人々に捉えられていたであらうことが推察できる。また、

前述の『抱朴子』内篇卷

十七登涉の記述や、『唐書』において「韋后妹嘗爲豹頭枕」以辟邪白澤枕以辟魅（韋后の妹嘗て豹頭の枕を爲て以て邪を辟し、白澤の枕を以て魅を辟す）とみえるように、鬼が自ら退いていく避怪の性質や、辟魅の性質といった、除災的性格を持っていたことがうかがえる。



【図②】

(三) 日本における白澤

日本における白澤の名前の初出としては、九二七年の『延喜式』に祥瑞として挙げられた中のひとつに見えるが、「白澤。二名澤獸。能言語知万物情。」（白澤。一名澤獸。能く言語し万物の情を知る。）という簡単な記載のみであり、

その姿についての言及はない。その後の資料を見ると、日本における白澤は、獸型と人面獸身型があり、獸型は中国と同じような龍系と獅子系に加え、一六三六年日光東照宮拝殿杉戸に狩野探幽が描いた牛に似た白澤⁹や、一七八一年『今昔百鬼拾遺』¹⁰に見えるヤギに似た系統【図③】など、様々な姿が見える。また、白澤が人面獸身であるとする文字資料



【図③】

料の初出は室町末期写本の『月菴醉醒記』¹¹であり、江戸期より前から、人面獸身であると考えられていたことがわかる。伝雪舟として狩野派模本にも人面獸身の白澤がみられるが、実際狩野派が元とした雪舟の描いた白澤の絵画が存在していたとすれば、『月菴醉醒記』よりも古く、人面獸身の白澤としては初出となる。また、人面獸身の白澤において、体は牛であるものばかりであり、龍や獅子の体に人の顔という白澤は見られない。

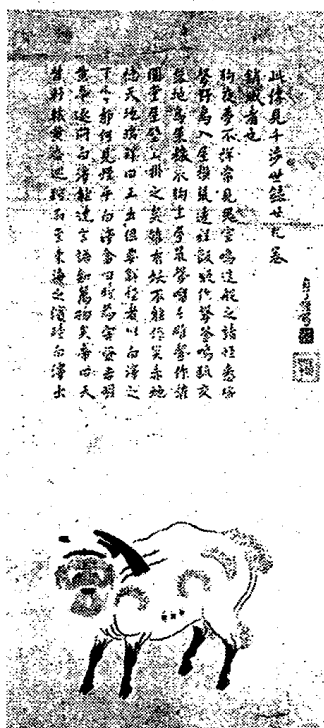
日本の白澤は、中国の白澤と同じように、避怪や辟邪・除災の性質も持っていたが、それだけではなく、例えば安政のコレラ大流行の時期に出された『安政午秋頃痢流行記』¹²では、枕元におけば悪い夢を見ず、諸々の邪気を避けるという言葉とともに、「神たちが世話をやく病このすへはもうなかとみのほらいきよめて」という和歌が載せられており、病を退けるという姿が明確に見られる。また、『旅行用心集』¹³に「山中にて狐狸猪狼の類、近付さる方」として「五岳、白沢の両図を懐中すれば、旅中の災難を免れ、悪鬼、猛獸近付ことあたはす。」とあり、また、同書中に白澤の絵が収録され、

此白澤の図を懐中すれば、善事をすゝめて悪事をしれぞけ、山海の災難、病患をまぬかれ、開運昇進の祥瑞あること古今云伝ふる所也。因而旅中ハ最尊信あるべし。

という文章も付されている。このことから、旅行の際の護符と考えられていたこと、『安政午秋頃痢流行記』と同様の病氣避けの性質や、開運昇進の祥瑞という性格も付与されていたことが見て取れる。他にも、信州戸隠の元宿坊、宮本旅館蔵の御札『白澤避怪図』¹⁴には、「戸隠山」と書かれていることから、山岳信仰とも関わりがあったと考えることができるなど、日本の、特に江戸時代において白澤は様々な分野で受容され、広まっていた。

(四) 琉球における白澤

琉球における白澤資料は少ない。初出としては、『歴代宝案』¹⁵の中の、一四二八年記事に中国の皇帝からの頒賜品として王や王妃に贈られた服の意匠の一つとして麒麟などと共に見ることができるとある。『歴代宝案』は文章のみであり、どのような絵図であったかは分からないが、この頃の中国王朝が明であったことを考えると、『大明会典』に掲載されているものと同様の獣型である白澤の姿が描かれていたのではないだろうか。琉球に現存する白澤の絵で最も古いものは、城間清豊(一六一四—一六四四)が描き、現在は沖縄県指定文化財となっている『白澤之図』¹⁶【図④】であり、ここに描かれている白澤は人面獣身である。他にも、一八四三年に琉球の八重山諸島を測量したサマラン号乗員であったE. Belcher が書いた『Narrative of the voyage of H.M.S. Samarang』¹⁷に見える「Ox God of Meia-co-shimas」など、琉球の白



【図④】

澤資料は数点を数えるのみである。また、中国関係資料に見える獣型と、一六〇九年の薩摩藩による侵攻後の人面獣身型の混在が確認できる。このことから、琉球においては、中国と日本、双方から白澤が輸入されては来たが、琉球文化の中に受容・定着がなされなかったということが出来るのではないだろうか。

(五) まとめ

以上に述べたことから、中国・日本・琉球において、白澤についての資料が存在し、その性格は除災や避怪や辟邪、また日本において旅行用の護符に使用されるなど、悪いものから身を守ってくれるものであったと考えられる。この白澤の避怪の性格や、前述の黄帝神話において、鬼神の名前を挙げて黄帝が世の害を取り除くことに貢献したことや『抱朴子』内篇卷十七登涉に「百鬼録」や「白澤図」、「九鼎記」で鬼の名を知れば「則衆鬼自却。」とあることから、白澤が鬼の名を知っていることで、鬼を退ける力を保持していたと考えられているということが出来る。一方、これから論じていく『涉世録』にも、鬼の名があげられており、尚且つ「則呼鬼名其怪忽自滅」(則ち鬼名を呼べば其の怪忽ち自ら滅す)とみえることから、鬼の名を知り、それを呼べば鬼を退けられるという考えが見て取れる。このことから、両者が結びついたのではないだろうか。白澤については、他にも論じる点が多いが、今後別稿を設けたいと考えている。

二 『涉世録』

以上のように辟邪や除災の性格をもつ白澤の絵図に、『涉世録』の文章が多く見られる訳だが、実際にどのようなものに見られるかをここで見ていきたい。まず、涉世録の名前だけ見えるものとして、一八二六年の『中陵漫録』¹⁸では、



〔図⑤〕

白澤の圖は黄帝圖すといへども、貞觀中の人の畫する所なり。其鬼名は、法苑珠林及涉世録等に見えたり。此圖も種々あり。余が蔵するは甚だ古雅なり。

としてその後には山海經と黄帝内伝の文章をあげている。また、一八三七年成立『海録』¹⁹ 卷十四「白澤演吉凶」には、

故事苑涉世錄、【廿一を引、】涉世錄未_レ檢、民間歲時記既引、

と挙げられているのが見える。『涉世録』の文章がみえるものとしては、成立年特定資料として、一六八一年『民間歳時記』²⁰ 獺の条、一七二八年『世説故事苑』²¹ 卷三「妖怪」、

一七八四年『百鬼徒然袋』²² 鳴釜（『涉世録』ではなく
「白沢避怪図曰……」として見える）、一七九九年『忠

臣水滸伝』²³ 第一回、一八四一年序『閑窓瑣談』²⁴ 後

編第五十が挙げられる。年代のみ特定できる資料とし

ては、『白澤之図』城間清豊（一六一四—一六四四）、『白

澤圖²⁵ 服部中庸（一七五七—一八二四）、『兔園小説』²⁶ 曲亭馬琴（『涉世録』ではなく「白沢図に…」として見える）、『白

沢考』²⁷
『白沢図説』²⁸
屋代弘賢（一七五八—一八四一）、『筠庭雜錄』²⁹
【図⑤⑥】喜多村信節（一七八三—一八五六）、

また、年代不特定資料としては、江戸東京博物館『白沢の図』³⁰（磯田湖龍斎 江戸後期）、内藤記念くすり博物館『白

沢図³¹（江戸時代）、福地書店古書目録『白沢辟怪図』³²（江戸時代）、宮本旅館蔵『白澤避怪図』【図⑦】（江戸時代）、



〔圖⑦〕

香川大学神原文庫蔵『白澤避怪圖』³³が挙げられる。それぞれの文章については、別に表を附したので、そちらをご覧頂きたい。

以上の中で、現在のところ、初出資料にあたるものは、年代特定資料としては城間清豊『白澤之図』が、成立年特定資料としては一六八一年の『民間歳時記』であるといえる。なお、資料の地域と

凡有此情，必是鬼名，女怪忽自滅入化，言我病甚，皆須令七子來，我必將劍拉去，汝等請自降，此言熱，我亦知情，舊日時害，天忌的，此言此瑞也。 乙卯春日 丑仲齊書



〔図⑥〕

しては、日本と琉球資料のみである。

三 『涉世録』と『白澤圖』

(一) 『涉世録』と『白澤圖』

ここで挙げる『白澤圖』は、中国の黄帝神話において、白澤が黄帝に語った鬼神について記述された文字資料の『白澤圖』のことであり、絵画としての『白澤図』とは違うということを初めに注記しておく。

『涉世録』と『白澤圖』の文章を比較してみると、『白澤圖』は多くが「故室之精」など、現象ではなく、特定の物についての鬼の名を挙げており、また、見える鬼の名や現象などは『涉世録』とは一致しない。このことから、『白澤図』と『涉世録』は別系統の妖怪についての資料であると考えて良いのではないだろうか。

西岡弘氏は論文『神獣白沢考』³⁴ 六 戸隠山「白澤避怪図」(ハ) 白澤避怪図において、

その文章中に見える『涉世録』は、いつの誰の著か、諸氏に問うたが未詳であり、従って「季子」なる人物も不明である。更に列挙された鬼名は何故それぞれの名を得たか、鬼名の意が判然としないのは、筆者の力不足である。卒読し得ぬ文字、『大漢和』に見えぬものは弘賢の上述資料により改めた。お経の中に見る呪文のように、音読し、くりかえし唱えるところに威力を発揮したものと思われる。(中略)『西陽雜俎』諸臯記上に、さまざまな鬼名が見え(東洋文庫本3十九—二三頁)、神荼と鬱壘は何方という鬼を管理すといひ、旧讎詞(昔のおにやらいの辞)の夢を食う「伯奇」や不祥を食う「攪諸」などに詳細な注があり、『道蔵』『洞神部』戒律類にみえる『女青鬼律』には、天下の鬼神の姓名、吉凶の術を記録する、とする。それらを詳細に尋ねてゆけば、この白澤圖に見える鬼に遭えるであろうか。

とのべている。しかし、氏が挙げられた『西陽雜俎』³⁵や『女青鬼律』³⁶を見ると、鬼の名の挙げ方は『涉世録』とは異なる。

また、『涉世録』に見える鬼の名の中で、「遊光」だけが『酉陽雜俎』諸皐記上に後漢の文学者である王延寿が夢にみた鬼として名が見えるが、ただ名前のみであり、どのような鬼であるかという詳細は全くわからない。

(二)『涉世録』文章の復元

『涉世録』の文章内容は、「白澤と黄帝の問答部分(A)」「現象とその鬼の名(B)」「Bで挙げた鬼の名を呼ぶことによる効果(C)」の大きく三つに分けることができる。文章復元に当たって、それぞれの部分ごとに①三本以上に出てきたもの②出てきた数の最も多いものを地の文として採用という基準を設け、それに則して行った。出来上がった文章は以下の通りであり、返り点と送り仮名は適宜筆者が補った。

A…『涉世録』卷二十一ニ 曰ク^(季) 季子問^(子也) 曰ク 人家ニ 或ハ 有^(有) 甌^(呼) 呼^(フコト) 或ハ 有^(有) 釜鳴^(一)
此何^(是)ノ 怪^(怪) 對^(テ) 曰ク 昔軒轅黄帝問^(二) 白澤^(一) 曰ク 天下寧靜^(ニシテ) 見^(シヤ) 何^(何)ノ 怪^(怪) 乎^(一)
白澤乃^(チ) 言^(フ) 若^(如) 要^(セバ) 解^(解) セント 怪^(怪) 但^(但) 將^(テ) 白澤^(一)ノ 圖^(一) 於^(テ) 堂屋壁上^(ニ) 掛^(ケ) レバ 之^(一)
雖^(モ) 有^(有) リト 妖怪^(一) 不^(不) 能^(能) 成^(成) スコト 災^(災) ラ

B…赤蛇落^(レ) ツ地^(ニ) 鬼^(一) 名^(一) ク大扶^(ト) 見^(ル) 蛇^(ノ) 相交^(ラ) 鬼^(一) 名^(一) ク神通^(ト)
蛇^(蛇) 入^(ル) 人家^(ニ) 鬼^(一) 名^(一) ク孔禽^(ト) 狗上^(ル) 人屋^(ニ) 鬼^(一) 名^(一) ク春女^(ト)
狗行^(テ) 及耳^(一) 鬼^(一) 名^(一) ク大陽^(ト) 狗上^(ル) 床^(ニ) (臥) 鬼^(一) 名^(一) ク神霞^(ト)
鼠^(鼠) 聲^(一) 唧々^(タル) 鬼^(一) 名^(一) ク金曹^(ト) 鼠耕^(シ) 破^(レ) 地^(ラ) 鬼^(一) 名^(一) ク金光^(ト)
屋上^(鼠) 作^(ス) レ 聲^(一) 鬼^(一) 名^(一) ク夜庭^(ト) 飯甌^(作) ス 聲^(一) 鬼^(一) 名^(一) ク歛女^(ト)
夜夢^(ミル) 不祥^(一) 鬼^(一) 名^(一) ク臨月^(ト) 夜夢^(ニ) 見^(ル) 鬼^(一) 鬼^(一) 名^(一) ク天光^(ト)

鶏生^(雞)二^ム輓^(歌)子^ヲ鬼^ヲ名^ク彩女^ト宵^ニ聞^ク鶏^(雞)聲^ヲ鬼^ヲ名^ク賊吏^(吏)
 鳥^(鳥)屎汚^ス衣^(人衣)鬼^ヲ名^ク飛遊^(遊)雌作^ス雄聲^ヲ鬼^ヲ名^ク死龍^ト
 野鳥入^ル屋^(裏)鬼^ヲ名^ク不穴^ト狐狸作^ス聲^ヲ鬼^ヲ名^ク懷珠^ト
 血汚^ス人衣^ヲ鬼^ヲ名^ク遊光^ト竈前^ニ菜生^ス鬼^ヲ名^ク水淡^ト

C. 凡^ソ此怪^{アリ}則^チ呼^ベバ鬼^ノ名^ヲ其怪忽^チ自^ラ滅^ス入^ルコト地^ニ三尺轉^{ジテ}禍^為レ福皆須^ク念^ス
 七聲^ヲ瑞應圖^{曰ク}黃帝^ノ時巡狩^{シテ}至^ル東海^ノ濱^ニ白澤出^ツ能^ク言語達^{シテ}以^テ分^ツ萬物^ヲ
 或^ハ於^{イテ}民^ノ為^シ畔^{コトヲ}害^シ賢^ヲ明德遂^ル則^チ出^ツ天地^ノ瑞祥^ノ者也

これを見てみると、出て来る鬼の種類はやや少ないものの、『瑞應図』からの引用が見られることから、現在見られる資料の中では、前期の資料に近いといえるのではないだろうか。このことから、近世前期からある程度まとまった形で存在し、気に入った部分だけを抜き出したり、鬼の名などが入れ替わったりしながら、徐々に現在の『涉世録』の文章が形成されていったものではないかと考えられる。

(三) 『涉世録』の発生

ここで、『涉世録』はどこで発生したのかということについても考察してみたい。推論としては、①日本で発生②琉球で発生③中国で発生・散逸が挙げられる。特に、③中国で発生・散逸したもので、日本には残っている資料は実際にあることから、興味を持った何者かによって、二十一巻部分だけ引用され、その孫引きが続いているという可能性がある。また、本としては存在してはいないが、誰かが尤もらしく作り上げた、いわば偽書であるという可能性もある。現存するのが二十一巻のみであるということ、鬼が引き起こす現象が日本の民間信仰にも多く見られるものであるということ

から、白澤という中国の神獣が、日本に輸入され、日本化していく中で、日本の民間信仰に取り込まれ、戯作などに登場するようになり、その戯作などの中から『涉世録』が作り出されてきたと考えることができる。その際に、海外資料の中で、何か元となったものがあつたかもしれない。鬼の名前は中国風でありながら、中国資料や漢籍目録、唐船持渡書にほとんど見ることができないことも考慮すると、①や③の可能性が高く、③であっても、原資料をもとに日本で発展しているように思えるが、確言はできない。

むすびにかえて

以上のことから、『涉世録』巻二十一は、白澤と黄帝の神話に関連させた妖怪の資料が掲載されており、また、それは現存の『白澤図』とは別系統の資料であることがみてとれる。さらに『涉世録』と『白澤避怪図』を混同しているものがあるように、白澤と『涉世録』の文章は、ひとまとまりと考えられていた可能性もある。また、文章の内容を見てみると、挙げられた鬼の名前を呼べば鬼が消滅するとしており、妖怪を退ける為の指南としている。このことから、当時の人々が、怪異や妖怪をどのように捉え、また、それらの害から逃れるためにどのような手段を用いていたかを知るための一端になるのではないだろうか。

『涉世録』が、本当に本として現存していたのかなどという疑問もあるが、少なくとも、この書を写したり引用している人々がいることから、一部では名が知られたものであり、存在しているものだと考えられていたと考えることができる。また、戯作などを通して、人々に『涉世録』や文章の内容が知れ渡っていたと想定すると、『涉世録』という名を出さないまでも、怪異や鬼の名だけ使用している文学作品があるかもしれない。当時の人々の思想や民間信仰を知るための手掛かりのひとつとなるよう、今後も資料を蒐集し、更に論を深めていけたらと考えている。

付記

本稿は、平成十八年十月七日に東海近世文学会で発表した。その際にご意見を賜った服部仁氏・服部直子氏・母利司朗氏・柳沢昌紀氏・早川由美氏・小林幸夫氏を始めとした諸先生方に深く謝辞を申し上げたい。また、図版掲載の許可を下さった長野県上水内郡戸隠村宝光社宮本旅館様にも、重ねて感謝を申し上げたい。

参考文献

『宮内廳書陵部藏船舶載書目』（關西大學東西學術研究所資料集刊七）上下

編著者 大庭脩 発行所 關西大學東西學術研究所 一九七二年

『中国神話伝説大事典』袁珂著 鈴木博訳 大修館書店 一九九四年

『道教事典』野口鉄郎他編 平河出版社 一九九四年

經典集林卷三十一『白澤圖』臨海 洪頤 撰集承徳 孫 校訂

（『原刻景印百部叢書集成』嚴一萍編輯 藝文印書館 一九六八）

1 四部叢刊初編縮本一二九『雲笈七籤』四 台北台灣商務印書館縮印正統道藏本 六八三頁

2 『山海經圖』胡文煥編 明格致叢書本影印 『中国古代版畫叢刊二編』第一輯所収 上海古籍出版社 一九九四年十月 一四
—一五頁

3 四部叢刊初編子部『抱朴子』（二） 上海商務印書館縮印江南圖書館藏明魯藩刊本

4 『大明怪典』李東陽等敕撰申時行等奉敕重修 江蘇広陵古籍刻印社 一九八九年八月 一〇五八—一〇五九頁

5 『大唐六典』唐玄宗撰 李林甫等奉勅注 『大唐六典』訓点 廣池千九郎 補訂 内田智雄 發行所 広池学園事業部 昭和四十八年（一九七三）十二月一日初版發行 三三二頁

6 『和刻本正史唐書（縮印版）（一）』解題 長澤規矩也 汲古書院 昭和四十五年（一九七〇）八月發行 三九四頁

- 7 『隋唐演義』元羅貫中原撰 清 人獲改撰 中國通俗小説名著第一集『隋唐演義』上册 主編者 楊家駱 發行所 世界書房
中華民國五十七年(一九六八)十一月再版 二二八—二二九頁
- 8 『延喜式』『国史大系』第十三卷所収 明治三十三年(一九〇〇)十一月十五日發行 発行 經濟雜誌社 六五三頁
- 9 日光東照宮拝殿杉戸に狩野探幽が描いた白澤 『日光東照宮の裝飾文様』人物・動物・絵画 解説 坂田泉・河野元昭 発行
者 久世利郎 編集 シーグ社出版株式会社 發行所 株式会社グラフィック社 一九九四年四月二十五日 初版第一刷発行
八二—八三頁
- 10 『今昔百鬼拾遺』安永十年(一七八二)春 遠州屋弥七版 『鳥山石燕画図百鬼夜行』監修者 高田衛 編者 稲田篤信 田中
直日 発行 国書刊行会 一九九七年十月十五月初版第六刷 二四七頁
- 11 『月菴醉醒記』一色直朝 室町末期古写本複製『月菴醉醒記』古典文庫第四一五冊 解説者 鈴木棠三 發行所 古典文庫 昭
和五十六年(一九八二)四月二十日刊 二二五頁
- 12 『安政午秋頃痢流行記』安政五年(一八五八)九月 金屯道人 天壽堂 国際日本文化センター所蔵
- 13 『旅行用心集』文化八年(一一八〇)発行 八隅蘆庵著 生活の古典叢書3『旅行用心集』(八隅蘆庵) 昭和四十七年(一九六二)
二月二十日初版第一刷発行 解説・注 今井金吾 發行所 八坂書房 四八頁 白澤の絵・・・七六頁
- 14 長野県上水内郡戸隠村宝光社宮本旅館蔵
- 15 『歴代宝案』校訂本第一冊 平成四年(一九九二)一月三十一日発行 編集 沖縄県立図書館史料編纂室 校訂和田久徳 発行
沖縄県教育委員会 一〇頁「白澤」として注に「澤ノ誤カ」と見える。他の頁では「白澤」という記述で見られる。
- 16 『白澤之図』城間清豊 『沖縄文化財百科』第一巻 発行所 多和田真重 發行所 那覇出版社 昭和六十三年(一九八八)五
月一日発行 八八頁
- 17 『Narrative of the voyage of H.M.S. Samarang』 Captain Sir Edward Belcher Narrative of the voyage of H.M.S. Samarang, Reeve, Benham,
and Reeve London 1848 国立国会図書館蔵
- 18 『中陵漫録』佐藤成裕 文政九年(一一八二六) 東關中島嘉春の序あり 『日本随筆大成』第三期第二巻 昭和四年(一九二九)
七月十五日発行 日本随筆大成刊行會 七二頁
- 19 『海録』山崎美成 文政三年(一一八二〇)六月—天保八年(一一八三七)二月 『海録』國書刊行會 大正四年(一九一五)十一

月二十五日発行 三二三頁

20 『民間歳時記』名古屋玄医 『民間歳時記』抱谷文庫本 新屋徳田十兵衛板 延宝九年（一六八一）国文学研究資料館マイクロ資料 十六丁ウー17丁ウ

21 『世説故事苑』子登著 小嶋屋勘右衛門他出版 享保十三年（一七二八）国文学研究資料館マイクロ資料 卷三 一〇丁オー一二丁ウ

22 『百鬼徒然袋』鳥山石燕 長野屋勘吉文化二（一八〇五）求板 国立国会図書館マイクロ資料

23 『忠臣水滸伝』山東京伝著 寛政十一年（一七九九）十一月刊 読本善本叢刊『忠臣水滸伝』平成十年（一九九八）十月十月初版第一刷発行 大高洋司編 和泉書院 底本 編者架蔵本 一九一二〇頁

24 『閑窓瑣談』佐々木貞高（為永春水）著 『日本随筆大成へ第一期』十四 所収 昭和五十年（一九七五）十二月二十日発行 編者 日本随筆大成編輯部 発行所 吉川弘文館 四一六—四一九頁

25 『白澤図』服部中庸 『特別展もののけ博覧会—妖怪の表現、その歴史と美術—』編集・発行 山寺芭蕉記念館 財団法人山形文化振興事業団 平成十七年（二〇〇五）七月二十六日発行 写真・・・三三頁 解説・・・四四頁

26 『兎園小説』『日本随筆大成 第二期 一』編者 日本随筆大成編集部 発行所 吉川弘文館 昭和四十八年（一九七三）十一月二十五日発行 一六頁

27 『白沢考』国立国会図書館蔵和装本 印記として山本氏蔵書とあり。

28 『白沢図説』国文学研究資料館マイクロ資料 地底叢書七八 所蔵者 宮内庁書陵部

29 『筠庭雜録』増補 解題によると、「続燕石十種におさめられて上中下三巻となるべきものが下巻は脱稿するに至らなかったと
してある。」とある。

『日本随筆大成へ第二期〜七』所収 編者日本随筆大成編輯部 発行所 吉川弘文館 昭和四十九年（一九七四）三月二十日発行 一五二—一五五頁

30 安政五年（一八五八）江戸東京博物館蔵 『呪いと占い 企画展開設図録』編集・発行 川崎市民ミュージアム 二〇〇一年四月二五日発行 三五頁 なお、本資料には作者名は明記されていないが、署名から磯田湖龍斎であろうと筆者は推測した。

31 『白沢図』愛知県 湯浅四郎氏 寄贈 内藤記念くすり博物館蔵

- 32 『白澤辟怪図』『福地書店目録』二〇〇四年 四九頁
- 33 香川大学附属図書館神原文庫所蔵
- 34 『國學院短期大学紀要』第十六卷所収 平成八年(一九九八)三月二十三日発行 三三―六六頁
- 35 『西陽雜俎』三 東洋文庫三九七 十九頁 段成式撰 今村与志雄訳注 発行所 平凡社 一九八一年五月 初版第一刷発行
- また、今村氏の付した注にも『女青鬼律』や「王延寿が夢にみた」ことについて詳しくみえる。
- 36 『女青鬼律』『正統道蔵』第三十冊所収 新文豊出版 一九七七年十月

『涉世録』諸本の比較

書名	A	B	C
民間歳時記	<p>涉世録卷之二十一 曰季子問^テ曰人家或^ハ有^リ甌^ノ呼^{コト}或^ハ有^リ釜^ノ鳴^{コト}此^レ何^ノ怪^{ソヤ}哉對^テ曰昔^シ軒轅黃帝問^ニ白澤^ニ曰天下寧靜^{ニシテ}怪見^{レン}乎白澤乃言如^シ要^{セハ}解^{セン}コト^ヲ怪^ヲ但將^テ白澤^ノ圖^ヲ於^ニ堂屋壁上^ニ掛^ケ玉^ヘ之^ヲ雖^モ有^ト妖怪^一不^レ能^ハ成^{コト}災^ヲ</p>	<p>○赤蛇落^ル地^ニ鬼^ヲ名^ク大扶^ト○見^ル蛇相交^ラ鬼^ヲ名^ク神道^ト○蛇入^ル人家^ニ鬼^ヲ名^ク孔禽^ト○狗上^ル人屋^ニ鬼^ヲ名^ク春女^ト○狗^ハイ十束十^丁吸耳鬼名大陽○狗上^ル床^ニ鬼^ヲ名^ク神霞^ト○鼠聲^ノ嗥^クタル鬼^ヲ名^ク金曹^ト○鼠耕^シ破^ル地^ニ鬼^ヲ名^ク金光^ト○屋上作^レ聲^ヲ鬼^ヲ名^ク夜庭^ト○飯甌作^レ聲^ヲ鬼^ヲ名^ク斂女^ト○夜夢^{ミル}不祥^一鬼^ヲ名^ク臨月^ト○夜夢見^ル鬼^ヲ名^ク天光^ト○鶏生^{スル}軟子^一鬼^ヲ名^ク彩女^ト○宵聞^ク鶏聲^ヲ鬼^ヲ名^ク賊吏^ト○烏屎汚^ス人衣^ヲ鬼^ヲ名^ク飛游^ト○雌作^レ雄聲^ヲ鬼^ヲ名^ク死龍^ト○野鳥入^ル屋裏^ニ鬼^ヲ名^ク不穴^ト○狐狸作^レ聲^ヲ鬼^ヲ名^ク懷珠^ト○血汚^ス人衣^ヲ鬼^ヲ名^ク遊光^ト○凡^ソ竈前蟻涌^キ出^ル名^ク則空^ト○桌上^ニ屋上^ニ鳴^ク時^ハ則名^ク已落鬼^ト○鼯入^ル家内^ニ鳴^ク鬼^ヲ名^ク平安^ト其^ノ還^シ財^ヲ福成^ルコヘナリ ○家内屋上或^ハ竈前^ニ菜生^ス其鬼^ヲ名^ク水淡^ト是^ノ怪呼^フハ鬼名^ク三尺^ト間^{ニシテ}滅^ス</p>	<p>凡有^ニ此怪^一則呼^テ鬼^ノ名^ヲ其怪忽自^ラ滅^ス入^{コト}地^ニ三尺^{ニシテ}轉^{シテ}禍^ヲ為^レ福^ト皆須^ニ念^{スル}コト 七聲^一瑞應圖^ニ曰黃帝時巡狩^{シテ}至^ル東海^ノ之濱^ニ白澤出^テ能^ク言^フ語達^{シテ}以^テ分^ツ萬物^一或^ハ於^ニ賢^ニ民^一為^レ畔^クコト^ヲ害^シ賢^ヲ若^{クハ}明德逐^ル則出^ツ天地瑞祥^ノ者也</p>

書名	A	B	C
世説故事苑	<p>涉世録二十一日季子問^ラ曰 人家或^ハ有^リ甌^ノ呼^{コト}或^ハ 有^リ釜鳴^一此^レ何^ノ怪^{ソヤ}哉 對^テ曰昔^シ軒轅黃帝問^ニ白 澤^一曰天下寧靜^{ニシテ}怪^見 レ^{ンヤ}乎白澤乃言如要^{セバ}解^一 セ^{ント}怪^ラ但將^ニ白澤^ノ圖^一 於^ニ堂屋壁上^ニ掛^レ之^ヲ雖^レ 有^ニ妖怪不^レ能^レ成^{コト}災^ラ 一自下妖怪ノ類ト怪一ヲ爲 鬼トヲ出セリ一</p>	<p>○赤蛇落^レ地^ニ鬼^ヲ名^ニ大扶^ト○見^ル蛇^ノ相交^一 鬼^ヲ名^ニ神道^ト○蛇入^ル人家^ニ鬼^ヲ名^ニ孔禽^ト○ 狗上^ル人^ノ屋^ニ鬼^ヲ名^ニ春女^ト○狗^ツ衝^テ吸^フ 耳^ヲ鬼^ヲ名^ニ大陽^ト○狗上^ル床^ニ鬼^ヲ名^ニ神霞^ト ○鼠聲^{々タル}鬼^ヲ名^ニ金曹^ト○鼠耕^シ破^ル地^一 鬼^ヲ名^ニ金光^ト○屋上^ニ作^ス聲^ラ鬼^ヲ名^ニ夜庭^ト ○飯甌作^レ聲^ラ鬼^ヲ名^ニ歛女^ト○夜夢^{ミル}不祥^一 鬼^ヲ名^ニ臨月^ト○夜夢^ニ見^ル鬼^ヲ名^ニ天光^ト○ 雞生^{スル}軟子^ヲ鬼^ヲ名^ニ彩女^ト○宵^ニ聞^ク雞聲^ヲ鬼^ヲ 賊吏^ト○烏^ノ尿汚^ニ人^ノ衣^ヲ鬼^ヲ名^ニ飛游^ト○ 雌作^ニ雄^ノ聲^ヲ鬼^ヲ名^ニ死龍^ト○野鳥入^ル屋^ノ裏^一 鬼^ヲ名^ニ不穴^ト○狐狸作^レ聲^ラ鬼^ヲ名^ニ懷珠^ト○ 血汚^ニ人衣^ヲ鬼^ヲ名^ニ遊光^ト○凡^ソ竈^ノ前^ニ蟻 涌出^ル名^ニ則空^ト○桌上^ニ屋上^ニ鳴^ク時^ハ則名^ニ 已落鬼^ト○鼯入^ル家内^ニ鳴^ク鬼^ヲ名^ニ平安^ト其^ノ 還^レ財^ヲ福成^{ユヘナリ}○家内屋上或^ハ竈前菜生其^ノ 鬼^ヲ名^ニ水淡^ト是^ノ怪呼^ニ鬼^ヲ名^ニ三尺^ト間 ニシテ減ス</p>	<p>已言^ル凡^ソ此^ノ怪アラバ其^ノ 鬼^ヲ名^ニヲ呼^{ヘシ}而^ラハ其^ノ 怪自^ラ滅シテ三尺地^ニ入^ル リ還^レ爲^レ福^ト瑞應^ノ圖^ニ曰黃 帝^ノ時^キ巡狩^{シテ}至^ル東海^ノ 之濱^ニ白澤出^テ能^ク言語達 シテ以^テ分^ニ萬物^ヲ或^ハ於^ニ テスル^ハ民爲^レ畔^{コト}害^シ賢^ヲ 若^{シクハ}明德遂^ル則出^ツ天地 瑞祥^ノ者也</p>

書名	A	B	C
百器徒然袋	なし	白澤避怪図曰飯甑作 ^レ 声鬼名 ^二 歛女 ^一 有 ^二 此怪 ^一 則呼 ^二 鬼 ^一 名 ^二 其怪忽自滅 ^一	なし
忠臣水滸伝	なし	是乃涉世録に。狗人屋に上る。鬼を春女と名づくといへるたぐひにて。必不祥の兆ならん。	なし
閑窓瑣談	涉世録に、怪事を〔割注〕俗にけち忌々しと云。〔禳ふ術を著したり。鼯の鳴声、狐の吼、鼠の噪、鶏の宵鳴、烏声、釜の鳴音、此類は悉く、鬼怪の所為なり。その所為をする、鬼の名を知覚て、呼節は、鬼怖れて、災をなす事あたわず。却て其家の吉事となると、記したり。〕	狗上 ^二 人屋 ^一 事あり這則、春女と名鬼の所業なり。狗上 ^レ 床事あり這を名 ^二 神霞 ^一 鬼の業といふ。宵聞 ^二 鶏声 ^一 。這鬼を名 ^二 賊吏 ^一 。屋上作 ^レ 声をする事あり這を夜庭と名鬼の所業とす。釜鳴音這を、歛女と名鬼の業といふ。鳥人衣に尿を汚這を飛游と名く。野鳥入 ^二 屋裏 ^一 這を不穴と名く。血汚 ^二 人衣 ^一 事あり其鬼を、名 ^二 遊光 ^一 。狐狸声あるは其鬼怪を、名 ^二 懷珠 ^一 。	此外猶多くあり。右に記す如き怪事ある時に、諭ば釜の鳴時に臨んで、其釜の前を、三尺隔て、彼釜の鳴業をする、歛女といふ鬼の名を、高らかに呼ぶ節は、其災の怪物、地中に入事三尺、還て其家の福となるといふ。鬼の名を呼て、災を福になすことは、夫々の鬼の名を覚て呼べし。

書名	A	B	C
<p>自了筆 白沢之図</p>	<p>昔軒轅黃帝巡狩而至東海之濱時白澤出黃帝遂問白澤能達言語知萬物矣帝曰天下寧靜何見怪乎白澤〔合十田〕曰時為害賢君明德天地瑞祥曰正出但要解怪者以白澤之圖堂屋壁上掛之矣雖有妖不能作災</p>	<p>赤蛇落地烏屎穢衣狗上屋鼠聲〔口十留〕々雌聲作雄聲野鳥入屋橫鼠透程飯甌作聲釜鳴狐交狗夜夢不祥常見鬼室鳴</p>	<p>這般之諸怪悉皆銷滅者也</p>
<p>服部中庸 白沢図</p>	<p>涉世録卷廿一日季子問曰人家或有甌呼或有釜鳴是何怪乎對云昔軒轅黃帝問白澤曰天下寧靜見何怪乎白沢乃云若要解怪 將白澤圖於堂屋上掛之雖有妖怪不能成災</p>	<p>なし</p>	<p>なし</p>
<p>兎園小説</p>	<p>なし</p>	<p>白沢図に、野鳥入屋、鬼名不穴「一作白竄。」と見えて、……</p>	<p>なし</p>

書名	白沢考
A	<p>涉世録卷廿一云^季李子問曰人家或有^二《瓦十曹》呼^一或有^二釜鳴^一是何怪乎對曰昔軒轅黃帝問^二白澤^一_(?+等)曰天下寧靜見^二何怪^一乎白澤_(?+等)乃言若要^レ解^レ怪但將^二白澤^一_(?+等)圖^一於^二堂屋^一○上^レ之雖^レ有^二妖怪^一不能^レ成^レ災</p>
B	<p>一赤蛇落^レ地 鬼名大扶 十三雞生^二輓子^一 鬼名彩女 二見蛇相交 鬼名神通 十四宵聞^二雞聲^一 鬼名賊吏 三蛇入^二人家^一 鬼名孔禽_狗 十五鳥屎汚^レ衣_人 鬼名飛遊四狗上^二人家^一 鬼名春女 十六「此十鳥」作^二雄聲^一 鬼名死龍 五狗行反耳 鬼名大陽 十七野鳥入^レ屋 鬼名不穴_石 六狗上^レ屋臥_床 鬼名神霞 十八狐狸作^レ聲 鬼名懷珠_{飛琳} 八鼠耕破^レ地 鬼名金光 十九血汚^二人衣^一 鬼名遊幾_光 十飯《瓦十曹》作^レ聲 鬼名「僉十^{吹一作}」女 十一夜夢、不祥_見 鬼名臨月 七鼠敲唧々 鬼名金曹 十二竈前生^{夜夢見} 鬼名水淡_{大光} 九鼠屋上聲 鬼名夜蓬</p>
C	<p>凡有^二此怪^一則呼^二鬼名^一其怪忽自滅入^レ地三尺_{以下不見} 轉^レ禍為^レ福皆須^レ念^二七聲^一</p>

書名	A	B	C
白沢図説	<p>涉世録卷廿一云李子問曰人 家或有二《瓦十曹》呼一或 有釜鳴一是何怪乎對曰昔軒 轅黃帝問二白澤曰天下寧 靜見二何怪一乎白澤乃言若 要解怪但將二白澤圖一 於堂屋〇上掛雖有妖 怪不能成災</p>	<p>一 赤蛇落地 鬼名大扶^{十三} 雞生二輓子一 鬼名彩女 二 見二蛇相交一 鬼名神通^{十四} 宵聞^{夕聽}二雞聲一 鬼名賊吏^史 三 蛇入二 人家一 鬼名〇孔禽^壁 鬼名屎汚^人〇衣 鬼 名飛遊 四 狗上二人家一 鬼名春女^{十六} 〔此十鳥〕作二雄聲一 鬼名死龍 五 狗行反 耳 鬼名大陽^{十四} 野鳥入屋 鬼名不穴^{石窟} 六 狗上屋臥^口 臥 鬼名神霞^{十三} 狐狸 作聲 鬼名懷珠^{一化珠} 八 鼠耕破地 鬼名 金光^{臨月} 血汚^{十六} 人衣^{十九} 鬼名遊畿^光 十 飯 《瓦十曹》作聲 鬼名《僉十々》女^{吹一化敵} 十一 九 夜夢不祥鬼名臨月^{天光} 七 鼠聲唧々 鬼名 金曹^{十二} 竈前生菜 鬼名水淡^{大光} 九 鼠屋 上聲 鬼名夜蓬</p>	<p>凡有^{以下不見}此怪則呼二鬼名一其怪 忽自滅入^屬地三尺轉^令禍 為^屬福皆須^令念二七聲一</p>

書名	筠庭雜録①	筠庭雜録②	白沢の図
A	なし	なし	なし
B	<p>赤蛇落地 鬼名大技 見蛇相交 鬼名神通 蛇入人家 鬼名孔禽 狗公人屋 鬼名□ 女 狗行及耳 鬼名大陽 狗公屋臥 鬼名 神霜 鼠耕破聲 鬼名金光 飯瓶作聲 鬼 名歛女 鼠聲唧、 鬼名金簡 雞生輦子 鬼名彩女 宵聞雞聲 鬼名賊火 鳥聲汚太 鬼名飛遊 《此十鳥》作雄聲 鬼名死龍 野鳥入屋 鬼名不穴 狐狸作聲 鬼名恒珠 欠汚人右 鬼名遊畿 夜夢不祥 鬼名吟 月 竈前生菜 鬼名水淡</p>	なし	<p>赤蛇落地鬼名大珠見蛇相交鬼名神通蛇入人 家鬼名□孔狗上人屋鬼名昏女狗行及耳鬼名 大陽狗上□臥鬼名神震豈設唧々鬼名金曹 井破地鬼名《阜一十》+品戸夜□禾祥鬼 名天光雞主輦子鬼名綵女夕聽雞巖鬼名賊史 鳥(尸+〇)(屈力)汚衣鬼名飛遊雖作雄聲 鬼名死龍野鳥入家鬼名石(穴+邑)狐狸作声 鬼名懷珠血汚人衣鬼名遊光</p>
C	なし	<p>凡有此怪則呼鬼名其怪忽自 滅入地三尺轉禍為福皆須念 七聲黃帝巡狩所於東海濱時 白澤出能言語以見萬物情除 民時害災思明德易顯天地瑞 也</p>	<p>凡有此怪則呼鬼名怪自滅入 地三尺轉禍屬福皆湏今七声 云云</p>

書名	A	B	C
<p>内藤記念くす り博物館蔵</p>	<p>□□録□□十一季子問曰人 家或有□呼或在釜鳴此何恠 □□□□□黃帝問白澤曰 天下寧靜見□□□白澤乃言 □□□恠□將白澤圖於堂屋 壁上掛之雖有妖恠不能成災</p>	<p>□□落地鬼名大扶見蛇相交□鬼名神通蛇入 人家鬼名□□□上屋鬼名春女狗上床臥鬼名 神古馳声唧々鬼名余曾□耕破地鬼名金光飯 甌作声鬼吹女夜夢見鬼名天光宵聞雞声鬼賊 史鳥屎汚衣鬼名飛遊野鳥入屋鬼名□穴□□ 作声鬼名懷珠血汚人衣鬼名遊光</p>	<p>凡有此恠則呼鬼名其□自滅 入地三尺轉禍為福皆須念七 声瑞應圖曰黃帝□□獨至於 東海濱出天下瑞祥者□</p>
<p>福地書店古書 目録</p>	<p>なし</p>	<p>□蛇落地 鬼名大扶 見蛇相交 鬼名神通 蛇入人家 鬼名壁孔 狗上人屋 鬼名春 女 狗行及耳 鬼名大陽 狗臥上屋 鬼名 神震 (竈一□) 聲唧唧 鬼名金曹 井破地 流 鬼名臨戸 夜行不祥 鬼名天光 雞生 輻子 鬼名彩女 夕聽雞聲 鬼名賊史 鳥 屎汚衣 鬼名飛遊 《此十鳥》作雄聲 鬼名 死龍 野鳥入屋 鬼名石 (穴十也) 狐狸作 聲 鬼名懷珠 血汚人衣 鬼名遊光</p>	<p>凡有此怪則呼鬼名怪自滅入 地三尺轉禍為福皆須令七聲 云々</p>
<p>香川大学神原 文庫蔵</p>	<p>涉世録卷之第二十一季子問 曰人家或有甌呼或釜鳴此何 怪也曰昔軒轅黃帝問白澤曰 天下寧靜見何怪乎白澤乃言 要解怪但將白澤之図於堂屋 壁掛之雖有妖怪不能成災</p>		

書名		
A	<p>宮本旅館蔵</p> <p>涉世録卷廿一卷李子問曰人家或《瓦十曹》呼或有釜鳴是何怪乎對曰昔軒轅黃帝問白澤曰天下寧靜見何怪乎白澤乃言若要解怪但將白澤圖於堂屋上掛之雖有妖怪不能成災</p>	<p>狩野派模本</p> <p>白澤避怪図涉世録第二十一云季子問云人家或甌呼或有釜鳴是何怪也答曰昔軒轅黃帝問白澤曰天下寧靜見何怪乎白澤乃言如要解怪但持白澤図堂屋壁上掛之雖有妖怪不能成災</p>
B	<p>赤蛇落地 鬼名大佚 鷄生輦子 鬼名彩女 見蛇相交 鬼名神通 宵聞鷄声 鬼名賊 吏 蛇入人家 鬼名孔禽 鳥屎汚衣 鬼名 飛遊 狗上人屋 鬼名春女 嶋作雄聲 鬼 名死龍 狗行及耳 鬼名大陽 野鳥入屋 鬼名不穴 狗上屋臥 鬼名神震 狐狸作声 鬼名懷珠 鼠耕破地 鬼名金光 血汚人 衣 鬼名遊畿 飯甌作声 鬼名歛女 夜夢 不祥 鬼名臨月 鼠声唧々 鬼名金曹 竈 前生菜 鬼名水淡</p>	<p>赤蛇落地鬼名大扶見蛇相交鬼名神通蛇入人家鬼名孔狗、上人屋鬼名春女狗行及耳鬼名大陽狗上床鬼名神霞□聲唧鬼名金曹□耕破地鬼名金光鼠屋上聲鬼名夜庭飯甌作聲鬼名□女夢見不祥鬼名臨月夜夢見鬼、名大光鷄生軟子鬼名彩女夜聞鷄聲鬼名賊吏鳥屎汚人衣鬼名飛遊雌作雄聲鬼名死龍□鳥入屋鬼名穴狐作聲鬼懷珠血汚人衣鬼名遊光</p>
C	<p>凡有此怪則呼鬼名七聲其怪忽自滅入地三尺轉禍為福皆須念七聲</p>	<p>凡有是怪即呼鬼名其怪□□三尺瑞応図云黃帝時狩至東海濱白澤出能言語達□万物以或於民為時害賢君明德遂則出天地瑞祥者也</p>